
Bitter Taste

かしわ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Bitter Taste

【Nコード】

N4409I

【作者名】

かしわ

【あらすじ】

一人の女性の、ある日のひとコマ。

（前書き）

まいど、ありがとうございます。かしわ、です。

次回作、まだ、かかりそうなので、突発的短編で……

前作とは、雰囲気が全く違うので、注意です。

ドアノブを回して、軽い扉を開ける。待っているのは、温かい光ではなくって、暗く湿った空気。

「ただいま」

返ってくる言葉なんてないのに、言ってしまう。

「おかえり」

それが、寂しくって、自分で返すようになったのは、一人暮らしに戻ってから、ひと月ぐらい経ってからだった。あの時、思わず零れた言葉に、もういない人の影を思い出してしまって、苦い笑いと、まだ、癒えきれなかった痛みが、同時に湧き上がった。

今は、それも、習慣になっちゃってしまっていて、恥ずかしさを含んだ苦笑だけが漏れる。

ぱちん、と壁のスイッチに手を伸ばせば、明かりが一気に部屋を照らす。

闇に隠されていた、日常のもろもろを、嫌味っぽく照らして、付きつけてくる。ちらり、と部屋の隅に積み重なっている洗濯物の山に目をやるが、見て見ぬふりで、テーブル上のリモコンに手を伸ばした。

ぶっつ

紐が切れるような音がして、一瞬の沈黙の後、寂しい部屋に、乾いた笑い声が響いた。

ああ、この時間にやっていたのか。

およそ、アーティストとは程遠い、二人のMCが人気絶頂のアイドルと談笑していた。

二人は彼女がどんな歌を歌うのかも、まったく知らないに違いない。

というか、熱狂的なファンでさえ、知らないような気がする。
コロロニヒビク

そういえば、言っていたな。

味気ないけれど耳慣れた音に、安心して、体に纏ったなれない衣服を一枚ずつはぎ取っていった。

上品に、と飾ったワンピースとストッキングの、抜け殻を床に落としたまま、手近にあった、ラフなワンピースをすっぽりと頭からかぶる。昨夜から丁寧に、手入れし、緩やかに巻いた髪を、ぎゅうつと一つに縛りあげた。

はらり、と舞落ちた一枚の白い紙を見つけた。

そこに刻まれた、某有名企業の社名と、ありふれた名前。裏を返して、ばかげたメッセージを見つけた。

クシャリとそれを握りつぶして、離れた屑かごに放り投げた。

綺麗に弧を描いたはずの、白い球は、こつんと屑かごの縁に弾かれて、ぼとりと、また、床に落ちた。

狭いキッチンの隣、ぶうんと低い音を鳴らす冷蔵庫を開けて、冷たいミネラルウォーターに手を伸ばそうとした、その時だった。意味もなく、つけていたTVの音に耳を奪われた。

『次のゲストは〜っ!〜!』

さっきまでいた、瞳の大きな可愛らしいアイドルは消え、代わりに派手な音響に合わせて次のゲストが登場するところだった。

『いやあ。君も最近また一層、流行らしてるみたいじゃない』

『ほんと、応援してくれる皆々様のおかげですよ』

『おい〜本当かあ? 思ってることは、ちゃんと口に出しとけよあ〜。マア、僕ノ実力カラ言エバ当然デスヨって』

『ええ！！そんなこと、当然すぎて、言えませんか』
どつ、と観客席に笑いが起こる。

『そんなに世慣れてきちゃってどうすんのよ』

『大丈夫ですよ。初心忘るるべからず、です。いつまでも、新人扱いでお願いしますよ』

『ここまで大物になって、それは無理でしょ』

MCの二人に、遠慮することなく、余裕をみせつつトークをこなす。時折、冗談を言えば、観客のファンの子たちから、明るい笑い声が上がった。

前は、TV雑誌に目を配って、出演番組を完全網羅していたこともあった。

久しぶりに、目にした人は、面影を残しつつも、すっかり別人になっていた。

『心に響く！？』

一瞬、息が詰まった。

『また、青臭いこと言って……』

『いいんですよ、いくら青臭かろうが。最近それを忘れてた気がするんですよ。で、今回のシングルを企画したんです』

『うわっ出た！宣伝だ！！』

『そうですよ、そのために来たんですよ』

嘘でも、俺らに会いに〜とか言えよ、と絡まれるのを、さわやかな笑顔でかわす。

茶化すこともできるはずなのに、なぜか、今は冗談を交えたくない、その笑顔はそう宣言しているように見えた。

『普通は、復刻版を出したとしても、録り直しなんてしないんですけどね。それでも、今、デビューシングルを歌いたかったんです』

『でも、なんでこの曲なの？これカップリング曲でしょ？』

『えっ』

『なになに？思い入れでもあんの？』

明らかにうろたえた様子を見せたゲストに、二人は、にやにやと意地悪な笑みを浮かべて、詰め寄った。

しばらく、いやあ〜と誤魔化していたけれど、しつこい追及に観念したのか、恥ずかしげに頬を若干染めて、奴は言った。

彼女です——と。

『デビューが決まる前にフラれたんですけど……かなり引きずりましたね。ずっと、彼女に頼りっぱなしだったんですよ。デビューも、別れてからでしたけど、完全、100%、彼女のおかげです』

『今頃、あつちは、惜しいことしたあって絶対思ってるよ』

『いや、それはないですね』

『お、言いきつたな』

『はい。だって、別れの言葉が、“これで、遠慮なく良い男に手を出せる！”ですよ……。強い奴だから……。』

『おいおい、まだ引きずってんじゃないだろうなあ』

『……まさか。これは、感謝ですね。あとは、見せつけ。自分はやり遂げ——』

部屋中に響いていた音が、唐突に途切れ、また静寂に包まれた。

ぼすっ

手にしていたリモコンをベッドに投げて、自分はその端に腰を下ろす。

冷蔵庫から取ってきた、2リットルの冷えたミネラルウォーターを、そのまま飲もうと、口をつけかけて、やめた。

熱くて、濃いコーヒーが飲みたい。

面倒くささを感じながらも、柔らかいベッドスプリングを揺らして立ち上がり、再びキッチンへと向かう。

昔の男が、大嫌いだった、コーヒーをいれるために。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4409i/>

Bitter Taste

2010年10月16日00時23分発行